さ

国語問題

はじめに、これを読むこと。

1. この問題用紙は十一ページある。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し、確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に記述すること。
5. 解答は、必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもＨＢ・黒)で記入すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定の欄以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. **解答用紙は、持ち帰らないこと。**
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。
12. 解答をマークする場合は、下の記入例を参照して、正しくマークすること。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ◍

一

次の文を読んで、後の問に答えよ。

自己意識の発生を考えるとき、心理学や精神分析ひいては動物行動学が、共通に注目している現象がある。鏡にたいする、幼児や動物の反応である。この反応が興味深い理由は、こうである。鏡に映っているのが自分だ、と分かるためには、自分が、他の事物と同じように、目に見える・ひとまとまりの個体なのだ、ということを理解していなければならない。自分は、他の事物と同じように、目に見える・ひとまとまりの個体なのだ……。このことの理解は、どのようにして可能になっているのだろうか？

ある生物が、鏡像を自分の姿だと認知しているのかどうか。たしかに、これを確かめるのは、簡単ではない。唯一可能なのは、その生物の振舞いから推定することだけである。それは、自分の足を食べないというタコの振舞いから、タコの〝自己意識(？)〟の有無を推定するのと同様である。しかし、鏡にたいする反応は、際立った特徴をもっている。たとえば、あるチンパンジーが、口元にクリームがべったり付いている顔を鏡のなかに見たときに、急いで自分の口元をぬぐいはじめたとしよう。こうした振舞いが、確実に規則的に観察されたなら、そのチンパンジーは、鏡像を自分の姿と認知している、と考えてまちがいない。

もちろん、鏡像への反応は、自己意識の存在の、ひとつの兆候にすぎない。鏡像を自分の姿として認知できるということが、自分というものが成り立っているための必要にして十分な条件だ、というのではない。もし、鏡像の認知が自己意識の必要かつ十分な条件だということになったら、眼の見えない幼児は、自分を意識できない、という信じられない話になってしまう。鏡像への反応は、あくまで自己意識の存立の、A兆候のひとつにすぎない。しかし、それは、非常に有力な兆候である。

もちろん、乳幼児の心理を考えるときに、視覚に焦点を合わせるのは、明らかに不当であろう。一方では、月齢が低ければ低いほど、皮膚の接触による触覚、a嗅覚、聴覚の役割が大きいはずである。他方では、体が意のままに動く・動かないとい

う、身体運動感覚が、重要な役割を果している。しかし、鏡像への幼児の反応は、早くから多くの研究者が注目し、多大の研究成果がルイセキ(ア)しているので、ここでは、それらを参考に考えてみたい。

さて、幼児の鏡像への反応にかんする研究のなかでも、児童心理学者ヴァロンや精神分析医ラカンの考えは、自己意識の生成を考えるときに、たいへんシサ(イ)的である。以下、この項では、彼らの議論のポイントだ、と私が理解したものを下敷きにして、自分の生成を考えてみる。

鏡に映っているのは、自分の姿だ、と思う。これは、私たちにとっては、あまりにも当り前である。ところが、幼児も、動物も、当初は、鏡に映っているのが自分の姿だ、ということが分からない。眼前には、他の子どもと似たような姿が、こちらを向いている。しかし、こちらから近づけば、そいつも近づいてくるし、あわてて後ずさりすれば、そいつも後ずさりする。触れても、暖かみも何もない。眼前に見えているものは、どうにも得体(b)が知れない。幼児や動物は、困惑し、やがて、そいつを見るのをやめてしまう。

ところが、人間の幼児は(のみならず古くはケーラーが指摘していたことだが、動物行動学によれば、チンパンジーなどの高等レイチョウ(ウ)類の子どもも)、ある時期にいたると、鏡に見えているのは自分の姿だ、と理解するようになる。ここには、いくつものことが、重層的に現われていると思われるが、そのうち特に重要だと思われることだけを考えてみたい。

鏡の向こうには、頭から手足までひとまとまりの姿が見える、しかし、そいつは、じつに奇妙なあり方をしている。居間の花びんも、玄関の木も、いつも見えているわけではないが、ちゃんと存在している。見たければ、居間に行くなり、ドアをあけさえすれば、いつでもそこに見える。他方、ママやポチも、いつも見えているわけではないが、ちゃんと存在している。ただ、[I]動いているので、いつでもそばに見えるわけではない、というだけのことだ。

ところが、鏡の向こうの姿は、そのどちらとも違うあり方をしている。そいつ(B)は、木や草のように決まったところにいて、そこへ行けば必ず見える、というのでもない。そうかといって、そいつが行ったり来たりするので、見えたり見えなかったり

する、というのでもない。そいつは、花や木と違って、ママやポチのように動き回る。しかし、そいつの姿が見えるのは、決まったところ、つまり鏡の向こうにかぎられる。いったい、どうなっているのだ……。

他人や、草花・動物といった事物は、必ずどこかある場所に存在しており、それがある場所に行けば、姿が見える。このことは、幼児も理解している。しかし、鏡の向こうに見える姿は、それとは違うあり方をしている。「それが位置している場所に行けば、その姿が見える」というあり方をしているのなら、そいつは鏡の向こうに存在しており、それに(つまり鏡に)近づいたときに姿が見える、というだけのことである。事実、幼児は、当初そのように理解していたからこそ、鏡に近づいたり離れたりしながら、C その姿に戸惑っていたのである。

そうすると、鏡に見えているのが自分の姿だ、と分かるためには、

・じっさいに存在するのだけれども、それが見えているところ(つまり鏡の向こう)に存在しておらず、

・じっさいに存在している場所(つまり鏡のこちら側)にいても、それをじかに見ることはできない、

という、 Ⅱ をしているものが存在する、ということが理解できねばならない。こうしたあり方をしているものとは、言うまでもなく、見ている自分自身である。しかし、そう言えるのは自分がそうしたあり方をしている、ということを理解できるようになった者だけである。問題は、自分が、そうしたあり方で存在する、ということが分かるために、D 何が理解されていなければならないか、である。

幼児には、人、家具、動物、雲、さまざまなものが、見えている。幼児にとって、見えるということが、存在しているということであり、存在するものは、それがある場所にいれば、必ず見える。しかし、自分の姿は、見えない。とりわけ、自分の顔は見えない。幼児が他人に注目するとき、その意識は、他人の顔に集中する(だから、幼児が人物を描くと、二つの目を中心に顔だけが大きく描かれ、手足は小さく、顔に付属して描かれる)。しかし、自分の姿とりわけ顔は、どちらを向いても見えない。

にもかかわらず、自分もまた、姿・顔が見えるものである。このことが分からないかぎり、いくら鏡に目をこらしても、そこには得体の知れない姿が見えるだけである。鏡像を自分の姿として認知できたときには、自分もまた、人や動物や家具と同じように、見える世界のなかに・見えるものとして存在している、ということが明確に、まさに目に見えるかたちで理解できたのである。

（大庭健『私はどうして私なのか』より）

（注）ヴァロン ―― アンリ・ヴァロン（一八七九～一九六二）。フランスの心理学者。
ラカン ―― ジャック・ラカン（一九〇一～八一）。フランスの精神分析学者。
ケーラー ―― ヴォルフガング・ケーラー（一八八七～一九六七）。ドイツの心理学者。

問一　傍線ア「ルイセキ」、傍線イ「シサ」、傍線ウ「レイチョウ」をそれぞれ漢字に改めて記せ。

問二　傍線a「嗅覚」、傍線b「得体」の漢字の読みをそれぞれひらがなで記せ。

問三　［Ⅰ］にあてはまる最も適切な語を次の中から選び出して、その番号をマークせよ。

① ことごとく　② おしむらくは　③ ひそやかに　④ しょっちゅう

問四　［Ⅱ］にあてはまる最も適切な語を次の中から選び出して、その番号をマークせよ。

① 最適なあり方　② 特別のあり方　③ 究極のあり方　④ 明確なあり方

問五　傍線A「兆候のひとつにすぎない」とあるが、これの意味するところを説明したものとして最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 幼児が鏡に映る自分を自分だと認知できなくとも、自己意識が存立している場合が絶対に存在する。
② 幼児が鏡に映る自分を自分だと認知できれば、自己意識が存立していると判定する根拠となりうる。
③ 幼児が鏡に映る自分を自分だと認知できても、自己意識が存立していると判断する必然性はとぼしい。
④ 幼児が鏡に映る自分を自分だと認知できなければ、自己意識が存立している可能性は全くありえない。

問六　傍線B「そいつ」とは、具体的にはどのような姿で鏡に映っているのか、それを表す語句を本文中より十二字で抜き出して記せ。

問七　傍線C「その姿に戸惑っていた」とあるが、その理由を説明したものとして最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① そいつは鏡の向こうにいるはずなのに、鏡のこちら側にある風景もそいつのまわりに同じようにあるから。
② そいつは鏡の向こうにいるはずなのに、鏡のこちら側にいるママやポチといつも遊べるわけではないから。
③ そいつは鏡の向こうにいるはずなのに、鏡のこちら側にあるもののような存在のしかたをしていないから。
④ そいつは鏡の向こうにいるはずなのに、鏡のこちら側にいる自分の動きを意識してもいるようであるから。

問八　傍線D「何が理解されていなければならないか」とあるが、それを具体的に述べた四十四字の箇所（句読点等を含む）を指摘し、最初と最後の五字を記せ。

問九　本文の内容に一致しているものとして、最も適切なものを一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 乳幼児の自己意識は、皮膚接触による運動感覚によって形成されはじめ、聴覚などの感覚による補強をへて、鏡像というもののあり方を視覚によって認知することで完成する。

② 乳幼児にとって、現実の存在物とは、ある定まった位置にあってそこへ行けば見ることのできるもの、移動はするがそれが自分の目の前に来れば見ることができるもののどちらかである。

③ 鏡像として映っている顔が、他ならぬ自分の顔であるということを理解できるのは、鏡の向こうに見える世界は、現実にはないものなのだということを論理的に把握するからである。

④ 幼児が人物を描くと、目を中心とした顔が強調されるのは、自分では見えない自分の顔と目というものを、他人の顔からなんとか推測してみたいとする無意識における欲求の現れである。

二　次の文は、室町時代に心敬が著した『ひとりごと』の一節である。作者心敬は、当時都にあって「応仁の乱」に遭遇した。これを読んで、後の問に答えよ。

内裏・仙洞・殿中を初めとして、城槨に構へ、大堀・逆茂木を十重二十重に引けり。金吾の方にも、かの亭以下を用害にきびしく構へ侍り。そのほか、洛陽の寺社・公家・武家・諸家・［　Ⅰ　］の家々、一塵も残る所なく、大野焼け原となりて、上下万人、A足を空にしてくれまどひ、四方に散り散りなりゆき侍るありさま、嵐の［　Ⅱ　］・木枯の［　Ⅲ　］よりもあとをとどめず。都のうち、目の前に修羅地獄となれり。

さて、数にもあらぬ心敬などまで、都のほとりには、草の一葉の隠ろへも枯れ果て、一つの露のよすがも頼むかげなくなり侍れば、かりそめに参宮など申し侍りて心をのべ侍るに、東の方にあひ知れる長敏といへる人、便船を送りて、ねんごろに富士などこのついでにと侍れば、波に引かれ、ただよひ侍り。やがてと契りて出でしかども、都の乱れいよいよ浅ましくなりゆき侍りて、海路・山路の便りをも失ひ侍れば、はからざるに、武蔵野の草葉を結びて一夜のかり寝と思ひしかども、二年の夏を送り侍り。都はるけき境なれども、いにしへの人の旧跡とて、和歌の心ざしの人・B色好みなども残り侍りて、をのづから忍び忍びに歌・連歌などの事をもたがひに語らひ侍ること、よりよりなり。

ある人の、都ほとり、よろづの道、昔に変はり果てぬるありさま、ことに歌・連歌などのなりゆき侍ることなど、ひそかに尋ねけるに、見聞き侍りしこともあとなく忘れ果て、またいささかのこともをこがましきやうに侍れば、返事にもあたはざりし。あながちに尋ぬること度々になりぬれば、胸に思ふことうちさらし侍らねば、腹ふくるるなどと古人も申し侍れば、草の枕の独りごとに、あらあらD近き世に見しことのかたはしをうち出で侍り。

（注）逆茂木　――　外敵の侵入を防ぐため、とげのある木の枝を外に向けて結った柵。
金吾　――　山名持豊（一四〇四～七三）。法名、宗全。応仁の乱における西軍の総帥。
長敏　――　鈴木長敏。武蔵国品川の辺の豪族。

問一　傍線1・2を口語訳せよ。（傍線部2については適切な語を補いつつ訳すこと）

1　心をのべ侍るに

2　やがてと契りて

問二　空欄 Ⅰ には、もともとは清涼殿殿上の間に昇ることを許されない人を意味し、ここでは一般人・庶民の意で用いられている語が入る。その語を漢字二字で記せ。

問三　傍線A「足を空にしてくれまどひ」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 抜け目なくあちこち走りまわり

② 放心状態となって大の字に寝転がり

③ 地に足が着かないほど困り果て

④ 足を棒にして食べ物や逃げ場を探し

問四　空欄 Ⅱ ・ Ⅲ に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① Ⅱ―空・Ⅲ―山　② Ⅱ―花・Ⅲ―紅葉　③ Ⅱ―庭・Ⅲ―野　④ Ⅱ―雨・Ⅲ―風

問五　傍線B「色好み」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 恋歌を上手に詠む人
② 華やかな衣装を好む人
③ 異性関係に熱心な人
④ 風雅や風流を解する人

問六　傍線C「いささかのこともをこがましきやうに侍れば」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 断片的なことを返答するのもみっともないように思われますので
② 些細なことにも逐一差し出がましい人のように感じられましたので
③ 細かいことを一々根掘り葉掘り尋ねるのも申し訳ない話ですので
④ ほんのわずかでもその事情を話す気分にはなれない状況でしたので

問七　傍線D「近き世に見しこと」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

① 戦火の影響で散り散りになった都の文人たち、とりわけ歌人や連歌師たちの消息。
② 旅の途中で見てきたこの国の歌枕や旧跡、とりわけ海路や山路などからの風景。
③ 昔とは一変してしまった都における諸芸の道、とりわけ和歌や連歌などの様相。
④ 乱世の継続により廃れきったこの国の人倫の道、とりわけ公家や武士たちの現状。

三

次の文を読んで、後の問に答えよ。（送り仮名を省いた箇所がある）

季札之初使、北過レ徐。徐君好ニ季札ノ剣ヲ。口弗ニ敢言ハ。季札心ニ知レ之ヲ。A

為レ使ニ上国、未レ献。B 還至レ徐ニ。徐君已ニ死セリ。於レ是ニ、乃チ解キ其ノ宝剣ヲ、繫ニ之ヲ徐君ノ冢ノ樹ニ而去ル。従者曰ク、「徐君ハ已ニ死セリ。尚ホ誰ニ予フル乎ト。」C 季子曰ク、「不レ然ラ。始メガ吾ガ心ニ已ニ許セリヲ之。b 豈ニ以テ死ヲ倍ムカンガ吾ガ心ニ哉ト。」

（『史記』より）

（注）季札 ―― 古代中国、春秋時代の呉国の名士。
徐 ―― 春秋時代の諸国の一つ。
上国 ―― 天子の都に近い国々。
冢樹 ―― 墓に植えてある木。

問一　傍線a「敢」と傍線b「豈」の読み方として、それぞれ適切なものを、次の中から一つずつ選び出して、その番号をマークせよ。

① はた　② なんぞ　③ あへて　④ あに
⑤ かつて　⑥ けだし　⑦ つひに

問二　傍線A「季札心知之」の「之」は、何を指しているか。適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

①　好季札剣　　②　口弗敢言　　③　為使上国　　④　徐君已死

問三　傍線B「為使上国、未献」の読みをすべてひらがなで記せ。

問四　傍線C「尚誰予乎」を内容が正しく伝わるように口語訳せよ。

問五　この文中に描かれた季札の行為の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び出して、その番号をマークせよ。

①　当人が亡くなっていても、親族に十分に約束を果たす立派な行為。

②　相手の心中を理解して、生死を問題とせず約束を果たす美しい行為。

③　相手との約束を無視してまでも自分の正当性を主張する豪気な行為。

④　周囲の思惑に左右されず、自分の思いを実行する勇気ある行為。